

大学病院の緩和ケアを考える会

ニュース・レター Vol. 23 No. 1

平成 30 年 5 月 1 日発行

大学病院の緩和ケアを考える会 事務局

〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8 昭和大学医学部 医学教育推進室

E-mail: jimukyoku@da-kanwa.org http://www.da-kanwa.org

編集責任者 高宮有介

- ご挨拶
- 第 24 回総会・研究会開催に向けて
- 準世話人リレー連載
大学病院における緩和ケアを考える
- 参加者募集！
第 5 回医学生の緩和ケア教育のための授業実践大会
- 第 32 回日本がん看護学会に参加して
- クールダウン エッセイ

ご挨拶

代表世話人 高宮 有介（昭和大学医学部）

陽春の時期です。新入職員、新入学生も入り、活気に満ちていると思います。

私は、4 月 1 日付で昭和大学医学部医学教育学講座の教授を拝命いたしました。緩和ケアで学んだ全人的ケア、多職種チーム医療を推進して参ります。

私事で恐縮ですが、昨年 12 月 25 日に昭和大学病院で右人工関節置換術を受けました。生まれつきの先天性臼蓋形成不全でした。小学校から剣道を始め、毎日 5 km のランニングを日課としていたスポーツマンにとって、10 年前に診断を告げられた時は青天の霹靂でした。「元々激しい運動はできない身体だった」と。緩和ケアに携わる中で患者さんも予期せぬ運命に驚き、次第に受け入れていけます。私も「この足もここまでよく頑張ってくれたね」と静かな生活に戻るつもりでした。ただし、全く痛みを感じずに運動できたのは筋肉でカバーされていたからだ。それなら、再び筋肉を鍛えようとしてトレーニングを始めました。ちょうどその頃、股関節



をサポートするウェアも発売され、剣道を再開できました。

昨年 60 歳になり、そろそろ人工関節もいいんじゃないかと整形外科医に勧められ、手術に至りました。手術もうまく行き、整形外科医からは「激しい運動をしなれば 30 年は持つ」と。ただし、寿命はわかりません。数か月後、1 年後のことさえも。まあ、自分の身体と相談しながら決めて行こうと思っています。でも、剣道部の現役の後輩とは竹刀を交えたいなあ。

さて、今年の総会・研究会は、山梨大学が主催です。同大学附属病院緩和ケアチームの飯嶋哲也世話人、中嶋君枝世話人が当番となり、鋭意準備を進めております。「大学病院における看取りを考える～よりよい終末期ケアのために～」がテーマです。診断時からの早期の緩和ケアも大切ですが、全ての人に必ず訪れる看取りについてみつめる機会にしたいと存じます。是非、ご参加ください（リハビリ中の写真）

第 24 回総会・研究会開催にむけて～山梨へようこそ！

山梨大学医学部附属病院 医療チームセンター 飯嶋哲也



来る平成 30 年 9 月 15 日（土）に第 24 回大学病院の緩和ケアを考える会総会研究会を、山梨大学医学部を会場に主催させていただきます。中嶋君枝看護師長とともに当番世話人を務めさせていただきます。大会

テーマは「大学病院での看取り期のケア～大切な最期のときに～」として大学病院における看取りについて、

じっくりと考える機会としたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

当院では 2016 年 3 月より 6 床の「緩和ケア病床」が稼働し始めました。大学病院が超急性期病院であるとするれば、end-of-life care として comfort care のみを提供する緩和ケアに特化した病床は必要ないといわれても致し方のないところ。しかし、学生時代に「死」に向き合う医療に実際に接することはとても大切なことだと思います。また、この「緩和ケア病床」

を運用していく過程で、よりよい「看取りの文化」が醸成されていくことが可能になるのではないかと考えております。

今回は、臨床の観点からの「大学病院での看取り」ということにテーマを絞って企画させていただきました。研究会冒頭のランチョンセミナーには東京共済病院の茅根義和先生に看取りのクリニカルパスであるリバプールケアパスウェイについての最新情報をお話いただく予定です。例年のワンポイントレッスンの代わりに「緩和ケア病床」におけるケアの実際を病棟スタッフ、主治医、緩和ケア医に提示してもらうことにしております。また、シンポジウムでは長田在宅クリニック院長の長田忠大先生をはじめとする在宅ケアチームの多職種の方々に、

「緩和ケア病床」から在宅療養に移行してご自宅で長期を迎えられた事例の看取りを中心に検討していただく予定になっております。大学病院と自宅との対比



「緩和ケア病床」から在宅療養に移行してご自宅で長期を迎えられた事例の看取りを中心に検討していただく予定になっております。大学病院と自宅との対比

の中で、看取りについて考える機会とさせていただきたいと思っております。そして、特別講演にはがん看護専門看護師で山梨県立大学の前澤美代子准教授に、看取りにかかわる医療者のセルフケアについてお話しいただくことになっております。前澤先生は、山梨県立大学看護実践開発研究センターで緩和ケア認定看護師の養成コースを創立・運営された緩和ケア教育のエキスパートでいらっしゃいます。

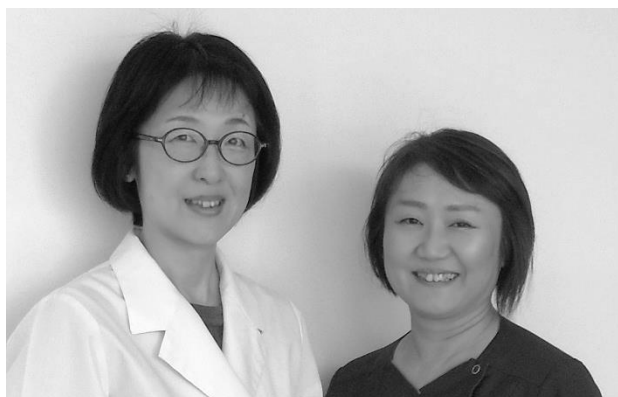
9月15日は秋の3連休の初日です。せっかく山梨においでいただくのであれば、ぜひお泊りいただき、秋の観光シーズンを満喫していただきたいと思っております。早めの宿泊予約をお勧めいたします。山梨にきてよかった、と言っただけのよう鋭意準備させていただきます。皆様、奮ってご参加いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

☆準世話人リレー連載 大学病院における緩和ケアを考える☆

イムス富士見総合病院 看護部 山口聖子

大学病院を離れ、5年目になります。2年前、いまの職場は、池袋から電車で約30分という埼玉県の病院です。縁もゆかりもない病院だと思って赴任したところ、なんと斉藤真理先生の妹さんがお勤めの病院ではありませんか！ご縁がありました・・・ということで、今回はお願いして一緒に写真を撮っていただいたものを掲載させていただきます。

さて、現職での私の役割には、患者さんやご家族と直接関わる場面はありません。代わりに、看護師を育成することにより、患者さんやご家族によりよいケアを提供できる病院になっていけることを目指しています。平成28年4月に120床増床した341床の急性期病院には、増床のタイミングで地域包括ケア病棟と回復期リハビリテーション病棟を併せもちました。都内の大学病院で治療を受けていた地元の方が紹介されることや、県内の大学病院との医療連携によって、リハビリ目的で在宅復帰のワンクッション



としてお引き受けしています。院内のベッドコントロールは看護部が行っていますので、他院からの転院入院の患者情報は日々聞こえてきます。大学病院での積極的治療の時期を過ぎ、“家族が住んでいる我が家”に近い場所で、療養しながら在宅復帰を目指そうとする患者さんの姿を思い描きながらも、あっさりした診療情報からはなかなか読み取れません。しかし、転院に至るまでには、緩和ケアチームやMSWや退院支援看護師などの職種が話を聴いて伝える場面もあるだろうから、と思っ直したりしています。他の病院とつながる窓口役割を担う当院職員には、看護部以外であっても、私は遠慮なく仕事に対して要求しています。もちろん職種によって内容の違いはありますが、どの職種に対しても同じことは『患者さんを大切にすること』精神が失われないうことなのです。当院でも、少しずつ緩和ケアの実践に向けた変化が見えてきました。昨

年、外科病棟が看護研究に取り組んだ内容は、緩和ケアに関するものでした。また、緩和ケア認定看護師教育課程を修了し現場に復帰した看護師が1名います。大学病院での緩和ケアを受けた患者さんをお引き受

ける私たちが、緩和ケアを知っていること、理解しようとする、実践することが大事だと思っています。大学病院からの転院患者さんの、ケアを連携できるような私達も力をつけていきたいと考えています。

参加者募集！“死に向き合う緩和ケア教育”

第5回医学生の緩和ケア教育のための授業実践大会

横浜市立市民病院 緩和ケア内科 斎藤真理

本年も、医学生の緩和ケア教育のための授業実践大会が開催されます。11月17日(土)10時より、旗の台にある昭和大学看護専門学校の演習室をお借りして、緩和ケア教育に関心をもつ医療専門職と現役医学生が入り混じってディスカッションを進めていくワークショップです。

このセミナー独自のテーマは「死に向きあう緩和ケア教育」となっています。つまり、医学生が死に向き合うことができるようになるためには、どういう学びを必要としているのでしょうか？なぜ必要なのでしょう？いかに伝えていけばよいのでしょうか？医療者養成カリキュラムの中に、まだまだ不足している教育コンテンツであろうかと思われています。意見を出し合い、一緒にまとめていきましょう。

第1部では、『看取りの作法をどう伝えるか』と題した講演を聖路加国際病院緩和ケア科部長、林章敏先生にお願いしています。医学生に、具体的、実際にベッドサイドで自分の患者の看取りについて教え

ることに、まずこの講演を通して考案してみます。

その後、第2部では学生、医療職混合でグループワークを行い、『医学生が死に向き合うための授業づくり』をしていきます。

緩和ケア教育に興味をお持ちの皆様が一人でも多くお集まりくださるようお願いいたします。(お申し込みの詳細は、広報チラシ、ホームページ等をご覧ください。)

追記。2018年3月末に横浜市立大学の教員職を辞し、現職に異動し日々実践の場に浸る毎日です。前の記事の山口さんの隣にいる眼鏡をかけた放射線科医は実妹、水越和歌です。『画像・シエマで納得！「つらい症状」のもとが見える』(青海社)を共編著しました。



第32回日本がん看護学会学術集会に参加して

平成30年2月3日・4日幕張メッセ・ホテルニューオオタニ幕張で第32回日本がん看護学会学術集会が開催されました。「変革の時代に求められるがん看護-くらしを支え尊厳をまもるための看護を問い直す-」が大会テーマであり、千葉県がんセンターの主催でした。今回は、発表なく一般参加しました。晴天の中、2日間で約4,800名の参加があり、どの会場も満員でとても盛況でした。

テーマにあるように、今後のがん医療の動向を踏まえて最新がん医療、若年がん患者の就労支援・妊孕性、高齢者・認知症がん患者へのケア、倫理的問題への対応、外来・在宅・地域看護、早期からのアドバンス・ケア・プランニング等の興味深い内容が多数ありました。

私は現在、緩和ケアチーム兼任で、整形外科病棟の看護師長として業務を行っています。病棟ではがん患

者に接する機会が少なく、緩和ケアチームで関わる患者に活かせる内容を中心に聴講しました。印象に残ったのは、シンポジウム1「早い段階から取り組むアドバンス・ケア・プランニング」です。当院ではがんの診断時や治療導入・変更時、緩和ケア移行時等に外来で苦痛のスクリーニングを行っていますが、早期からのアドバンス・ケア・プランニング(以下ACPと略す)については取り組めていない状況です。ACPを行うタイミング、関係性構築、意向を確認する環境等、まだまだ課題が多いことを実感しました。入院期間の短縮により、治療方針の決定や意思決定支援の多くは外来にシフトしています。平成30年度の

川崎市立多摩病院 伊藤優子



診療報酬改定では、入院支援加算が入退院支援加算に変更となる予定です。外来看護のセッションも多数あり、他施設の様々な取り組みを知ることが出来ました。外来機能の充実に向けて、体制整備が必要であり、緩和ケアチームの活動も外来機能へ貢献できるようにしたいと思いました。

せっかく千葉まで遠出しましたので、2日目終了後

に恒例の駅前アウトレットに寄りました。自分へのご褒美に洋服を安価で購入し、心も豊かになりました。

今回の学術集会は熊本大学大学院生命科学研究部 教示国府浩子氏を学術集会長とし、平成31年2月23日・24日に福岡国際会議場で開催されます。今回と同様に学びの多い会であることを期待しています。皆様もぜひご参加下さい!!

○●クールダウンエッセイ～医師と看護師の《良好な！？》関係とは○●

このたび、栄えあるクールダウンエッセイを任された相澤と申します。現職の前は、しばらく緩和ケア専門の訪問看護師をしていましたが、数年前から緩和ケアチームの専従看護師として大学病院に勤務しています。現在の緩和ケアチーム医師であるF先生とは、縁あって、訪問看護師の頃からずっと一緒に働かせて頂いています。そんな私とF先生の関係についてのお話です。ご興味のある方は、少しの時間、お付き合いください。

F先生との出会いは、私が新卒で大学病院に勤務していた頃でした。まだ「緩和ケア」という世界を知らない私に、「緩和ケアやらない？」声をかけてきたF先生を「興味がありません」と冷たくあしらったそうです（←今でもF先生は根に持っているようです）。その後、あの手この手で緩和の道に誘われ、足を踏み入れ・・・いまでは緩和の道を邁進する日々です。

ひよこの私を、ニワトリまで育ててくれた恩人のようなF先生ですが、怒ると鬼のようにコワイ存在です。男性だからか、医師だからか、必ず理詰めで攻めてきます。理論派のF先生と、直観派の私との攻防戦。薬のこと、ケアの方針、家族の調整、ことあるごとに大喧嘩です。双方に言い分があるので、どちらも一歩も譲りません。ですが、思いを存分にぶつけ合い、どちらかが砕け散ったあとには、（お茶を飲みながら）きちんと和解するのでご安心ください。毎日のように喧

防衛医科大学校病院 緩和ケア認定看護師 相澤佳代子

嘩しますが、決して仲が悪いわけではありません（たぶん）。むしろ、F先生と私は、犬も食わない喧嘩を毎日繰り広げられる程の良い関係と言えるのかもしれない。なお、世話人会でも小競り合いを繰り広げましたので、世話人の皆様方をご承知のことと存じます。



緩和ケアでは阿吽の呼吸が求められることも少なくありません。私は最近、F先生が考えていることであれば、だいたい分かるようになりましたし、心の声も聞こえるようになりました（笑）

私が考える医師と看護師の良好な関係というのは、互いを認め合い、忌憚ない意見を言い合える関係ではないかと思えます。F先生と私の関係でいえば、思っていることに耳を傾けてくれる医師、臆さずに上申する勇気をもった看護師の組み合わせであり、切磋琢磨しながら上質な緩和ケアを目指す、ライバルでもあり、戦友でもあり、同志のような関係であると言えるのかもしれない。

これからも良好な関係を維持し続けるために、F先生と私の攻防戦は続くことでしょう。（防衛医大なだけに・・・）

クールダウンエッセイを会員から募集します！

これまで、ニュース・レターのクールダウンエッセイは世話人が担当して参りましたが、次号から会員の皆様からも募集いたします。「趣味の話」「最近興味があること」「旅行記」「みんなに聞いてほしい話」「宣伝を兼ねて紹介したいこと」等々、皆様からの原稿を奮ってご応募ください。

<応募要領>

お名前、ご所属、テーマ、原稿（900字程度）、執筆者の写真をメールで事務局までお送りください。大学病院の緩和ケアを考える会事務局 メールアドレス：jimukyoku@da-kanwa.org

尚、応募者多数の場合は、ニュース・レター編集担当世話人、代表世話人による厳正な審査の上、掲載いたします。掲載が決定しましたらご連絡いたします。落選の場合はご連絡いたしません。ご応募、お待ちしております！！

